福音新聞
THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教100～110周年
標　語
感謝の百年
希望の百年
（テサロニケ第1/5：18）

1963年9月20日　第3種郵便物許可（毎月一日発行）
2017年12月1日（金）　第768号
発行所　福音新聞社（1部100円）
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人／金 鐘 賢・編集人／金 柄 鎬
印刷所　青丘文化社

聖誕主日説教

イエス・キリストの誕生は

＜マタイによる福音書：18～25＞

宋南鉉 牧師（大阪第一教会）

毎朝発刊される新聞には、天気予報が常に掲載されています。しかし、ときには天気予報が普段と比べて、大きく掲載されてることがあります。さらに、天気予報の内容も詳細です。なぜでしょうか？　その理由は、特別に強く知らせたい天気予報 だからです。マタイによる福音書にも「誕生」と言う単語に関しておなじような話があります。

新共同訳聖書、マタイによる福音書には、「誕生」という単語が１章18節と14章６節の２カ所に記されています。しかし、この２カ所に記されている誕生は、全く異なる内容の単語であると言えます。なぜなら、１章18節の誕生は、イエスの誕生ですが、14章６節の誕生はヘロデの誕生だからです。マタイ１章と第14章をさらに深く読めば、イエスの誕生とヘロデの誕生には、多くの差があることを発見することができるのです。マタイは、１章でイエスの誕生に関する過程や目的を述べているのですが、14章のヘロデの誕生では、その過程や目的については述べていないことがわかります。このことによって、マタイによる福音書は、イエスの誕生過程と目的を通して、クリスチャンに強く訴えたい信仰のメッセージがあることが分かるのです。マタイによる福音書が強調する信仰のメッセージは次の三つであると考えられます。

第１番目です。マタイによる福音書１章18節で、イエスの誕生は、聖霊によるものであることが強調されています。聖霊はしるしや奇跡を起こす力を持っています。 聖霊は、マリアがヨセフと婚約して同居する前に身ごもらせることもできます。人々を、ほかの国々の言葉で話し始めさせることもできるし(使２: ４)、ここへ行こうと目的地を決定した人の心を変えることもできます。（使８：29）

使徒言行録では、パウロが伝道(宣教)旅行をした、あらゆるところで、何度もしるしや奇跡を行ったことが記されています。例えば、14章で、生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがない人を歩けるようにした話があります。けれども、パウロはローマの信徒への手紙15章18節と19節で、これらのしるしと奇跡は聖霊の力によって行われたのだと、自信を持って語っているのです。聖霊は驚くべき力を持っていると言うことです。

第２番です。マタイによる福音書は１章21節で、イエスの誕生は、人々を罪から救うためであることを強調しています。マタイによる福音書の話が展開された時代は、ローマの信徒への手紙３章23節に記されているように、人々は皆罪を犯して、神の栄光を受けられなくなっている暗闇の時代でした。律法学者たちは、人々から正しく見られようとして、偽善と不法で満ち（マタイ23：28）、祭司たちさえ、神にささげるための祭物が、神殿で売買されていることを放置しました。（マタイ21：12）人々が、罪から救われる道が妨げられていました。それで、マタイによる福音書は、イエスが正しい人を招くためではなく、罪人を救うために来られたことを強調しています。

第３番です。マタイによる福音書は１章22節で、イエスの誕生は、神の言葉によって実現したことを強調しています。 現代医学では、イエスの誕生を説明することができませんが、神の言葉は、イエスの誕生を説明することができます。出エジプト記14章では、イスラエルの人々がエジプト軍に追われ、危機的な状況にあった場面が記されています。その時神は、モーセに杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べなさいと言われました。ノアが作った箱舟よりも大きな箱舟が必要な時に、神はモーセが杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べることが危機からの脱出方法だと言われたのです。 その結果、神の言葉は実現し、海の水は左右の壁となり、乾いた所が現れ、イスラエルの人々は箱舟がなくても、海を渡ることができたのです。（出14：29）神のすべての言葉は、人が想像できない方法と時に実現されます。数十年、数百年が経っても、必ず実現されるのです。（ペトロの手紙二３：9）

聖誕節には、至る所で、新韓日讃頌歌109番「きよしこの夜」が流れています。しかし、大多数の人々はその曲を聞いても、聖書が語るイエスの誕生過程と目的をよく理解していないかもしれません。今回の聖誕節に、イエスが誕生された飼い葉桶が描かれたイラストと、マタイ１章18節～ 25節の、みことばが書かれた聖誕節カードを送るならば、これまで以上に意味がある聖誕節になると思います。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。（マタイによる福音書１：23）

在日コリアン文化の創造と多文化共生社会を目指して、在日本韓国YMCAは皆様と共に歩みます。

YMCA

東京◆ホテル：東京で一番安く便利な宿泊研修施設。フロントは日･韓･英語に対応、24時間営業。
10名様～200名様の会議及び宿泊研修（50名）も可能。
◆スペースYホール：200席の多目的ホール。セミナー･コンサートなどに対応。
◆韓国文化教室（チャング･カヤグム･舞踊）　◆韓国語講座
◆YMCA東京日本語学校（3ヶ月～2年、短期研修）
関西◆にほんご教室（新規開講･募集中）　◆韓国民俗芸術科（舞踊･チャンゴ）

税 込	平 日	休日
シングル	¥6,700	¥6,200
ツイン	¥10,500	¥9,800
トリプル	¥13,500	¥12,600
※朝食¥200（宿泊者価格）		

在日本韓国YMCA　http://www.ymcajapan.org/ayc/jp/　＊会員及び教職者割引有。詳しくはお問い合わせください。
東京韓国YMCAアジア青少年センター　〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-5-5　☎03-3233-0611
関西韓国YMCAアジア青少年センター　〒537-0025　大阪市東成区中道3-14-15　☎06-6981-0782

アジア宣教会議が開催

ミャンマーで行われ、許伯基牧師が参加

10月12日より16日の５日間にかけて、ミャンマー・ヤンゴンのフランク・オーディトリウムにて、アジアキリスト教協議会（CCA）によるアジア宣教会議が開催された。これは1994年に韓国で開かれた最後のアジア宣教会議から23年ぶり、CCAの創設60周年記念を兼ねて行われたものである。この歴史的な会議に、アジアを中心に世界各国から約600人の参加者が集まった。日本からは各教派、団体から９名、韓国からはなんと30名を超える参加者があった。在日大韓基督教会からは許伯基牧師が参加した。

「アジアにおける真理と光とは何か、を預言的に証しする旅路をともに」という主題のもと、アジアの現実が抱える問題に対する神学的な考察が講演され、またアジア各地でキリスト教会運動としてなされている様々な取り組みに対する報告がなされた。その分野は多岐にわたった。宗教間の対話と平和の構築、環境破壊と経済的不正義の問題、移住民の受け入れと少数者の権利保護、キリスト教信仰の脱植民地化と土着化などである。

韓国からは、PCKの前事務総長であるイ・ホンジョン牧師（11月にNCCK次期総務就任が内定）が、北朝鮮の現状と朝鮮半島分断の克服について発題した。

日本からは東北ヘルプ事務局長である川上直哉牧師が、被災地における超宗教的な弔いの実践と、福島の被爆被災地における心身のケアの取り組みを発表した。

会議は最終日の16日に10頁にわたる「アジア宣教宣言」を採択した。その中でCCAは「まことの宣教の中で、神は私たちに他者に対する寛容さと癒しの能力を与えられる。だからこそわたしたちは、葛藤と緊張のただ中に平和を築き、他の信仰を持つ兄弟姉妹とさえも調和を成し遂げる使命を帯びるのである」とし、宗教や政治理念の違いにより争いの絶えないアジアの現実を、キリスト教の宣教課題とした。

エキュメニカルな大会に参加すると、いつも楽しみなのは礼拝である。プログラムは毎日礼拝で始まり、礼拝で終わるが、その時ごとに、各教派が導く多様な礼拝を体験することができる。簡略化された説教中心の礼拝順序になれている私たちにとっては、とても新鮮な経験である。特に圧巻だったのは、最終日の朝に捧げられた、演劇仕立ての礼拝であった。舞台では、戦争、暴力、セクシャル・ハラスメントなどの形をとった、私たちの中に内在する「罪」が、いかにして私たちアジアの人々の関係を引き裂いていったかが躍動的に表現され、それを乗りこえさせてくれるのは、今回の重要テーマの一つである「十字架の霊性の体現」であり、それを担っていくのが、ここCCAのアジア宣教会議に集められた私たちひとりひとりのつながりである、と表された。

閉会礼拝では、参加者全員が参与する聖餐式が持たれたが、私は光栄にもその司式の一部を担うこととなった。

わたしたちがミャンマーを思う時、長く続いている軍政による独裁や、アウンサン・スー・チー氏の軟禁、そして昨今のロヒンギャと呼ばれるイスラム系少数民族に対する虐待などから、どうしてもきな臭く政情不安なイメージを持ってしまいがちである。しかし、ヤンゴンの市内をあてもなく歩き回りながら受けた印象は、貧しいけれどもポジティブなパワーに満ちあふれた町、であった。人々の目は輝き、笑みが絶えず、たくましさに溢れている。そして圧倒的な仏教国であるが、キリスト教会が社会の中でしっかりと存在感を放っている感じを受けた。むしろ、物質的豊かさの中でネガティブになりがちで、クリスチャンとしての影響力を社会にほとんど発揮できていない私たちの存在を問われている感じがした。このような機会をあたえてくださった神と総会に心から感謝したい。

（報告：許伯基牧師）

第4回韓日5教団宣教師に関する実務者会議を開催

2017年11月27日～28日、同志社びわ湖リトリートセンターにおいて、韓日５教団宣教師に関する実務者会議が行われた。主に宣教師を受け入れる側の、在日大韓基督教会と日本基督教団、宣教師を送る側の大韓イエス教長老会（PCK）、基督教大韓監理会（KMC）、韓国基督教長老会（PROK）の実務者が、宣教師の派遣、訓練、現地適応などの情報を共有し、良い方法を模索する会議であり、今回の会議には日本基督教団書記の雲然俊美牧師が、３回までの経過報告に兼ねた、これからの討議を進めていく課題の内容を発題し、在日大韓基督教会書記の趙永哲牧師が、宣教師としての経験や、問題提起などを発題した。

討議の中から提起された、宣教師の危機管理や問題解決のためには、しっかりした規則を作る必要性があることに同感し、次回の会議にはそのような内容を中心にして、各教団からの事例や規則などを、紹介し合うこととした。次回の会議は2018年３月８日～９日に韓国で行う。

全国女性会

韓国夏期短期教育プログラム
全国女性会から6名参加

昨年に引き続き、大韓イエス教長老会(統合)女伝道会が主催する第61期夏期短期教育（2017年８月７日～10日）に全国教会女性連合会から６名が参加した。３泊４日間、韓国全土から集まった約200名の女性たちと共に、朝９時から夜９時までハードスケジュールではあったが、恵み深い学びの時を過ごした。

講義は「アジア宣教とエキュメニカル運動」、「神の心を知る」、「改革信仰と組織神学」、「女性と教育」、「21世紀キリスト教霊性」、「ヨハネの黙示録」など多様な講義内容となっており、有意義な時間であった。講義の中で特に印象に残ったのは「インドのマザーテレサ」と呼ばれたソソピョン宣教師のお話だった。実母から３度も捨てられるという悲痛な体験を受けながらも、その絶望の中で十字架を慕い、痛みや悲しみを信仰に対する情熱に変え、使命を持って看護宣教師として韓国に来られたそうである。貧しい人、病弱な人、女性や孤児になった子供たちの為に仕えた彼女のモットーが「成功ではなく、仕える」だったそうだ。

私たち在日も、歴史的背景や日本社会での窮屈な環境などの問題はあるが、「何故、この地に生まれてきたのか？何故、本国を離れてここで暮らしているのか？」を考える時、そこに神様のご計画や御心があると知る事で、これからの日本での宣教や、次世代への信仰継承など改めてするべき事がたくさんあると思った。そして個人から各教会、各地方会、全国女性会、世界宣教とはすべてはひとつであり、繋がっていると確信する機会がこの研修会で与えられた。

（報告：石橋真理恵）

西部女性会

神戸教会で一日研修会開催
「心をこめて讃美しよう」という主題で

西部地方教会女性連合会の「一日研修会」が10月24日（火）、神戸教会において開催され33名が参加した。開会礼拝は西部地方会長の韓世一牧師による「私たちの誇り」（エレミヤ書９：23～24）と題してのメッセージがあった。

神戸教会女性会の心のこもった昼食をした後、午後からの研修は講師に神戸東部教会で聖歌隊を指導している車賢淑執事をお迎えし、「心をこめて讃美しよう」という主題で神様に讃美を捧げた。参加した者が、心と思いをひとつにして、神様に栄光をささげ恵み豊かな研修会となった。

（報告者：尹豊子）

西部地方会

李相徳牧師の委任式
三次教会で盛大に挙行

11月11日（土）、西部地方会の三次教会において、李相徳牧師の委任式が盛大に行われた。

臨時堂会長中江洋一牧師の司会のもと、西部地方会副会長の李重載牧師による「聖霊に満たされる教会」（使２：42～47）という説教をもって礼拝が行われた。

委任式では、西部地方会長の韓世一牧師の司式のもと、委任牧師に対する誓約と、三次教会の信徒に対する誓約の後、宣言がなされた。その後、委任牧師に対する勧めの言葉を梁榮友牧師が、信徒に対する勧めの言葉を朱宗中長老が述べ、祝辞には地方会の代表として、副会長である趙舜元長老、日本基督教団の代表として大月純子牧師（上下教会）、派遣教団を代表して曺紗玉牧師が述べた。

委任された李相徳牧師は、1972年韓国で生まれ、2001年監理教神学大学院卒業、2013年に基督教大韓監理会中央年会にて牧師按手を受け、2013年～2016年日本基督教団千葉本町教会へ宣教師として派遣された。2017年４月29日に西部地方会に加入し、５月末に三次教会に赴任した。家族は、呉允定夫人と二人の子どもがいる。

（報告：中江洋一）

邑久光明園家族教会訪問
関西聖歌隊連合会と岡山教会が合同で

今年も、去る９月18日、関西聖歌隊連合会が邑久光明園家族教会で合同礼拝を持った。今年は、関聖連のメンバーと岡山教会など、９教会31人の信徒たちと共に合同礼拝を捧げた。

礼拝（説教：金鍾権牧師）、讃美（指揮：尹聖澤長老）、２部では、家族教会の信徒の信仰の歴史と証しをして聞き、信仰の力強さと深さを学んだ貴重なときとなった。

（報告：尹聖澤）

＜年末年始業務案内＞

総会事務局は年末年始下記の期間業務を休業いたします。
2017年12月25日～2018年１月４日

日本キリスト教会との宣教協約締結20周年記念集会開催

「青年宣教」をテーマに、青年らの友情育む

11月23日（木）日本キリスト教会の大阪姫松教会で、日本キリスト教会と在日大韓基督教会の宣教協約締結20周年の記念集会が開かれ、両教団合わせて64名が参加した。

大きなテーマは青年宣教で、集会の構成は、両教団の青年たちが、半年以上、毎週のように会議をしながら組み立て、テーマを『「欠け」のある者から「欠け」がえのない者へ』と設定した。冨永憲司日本キリスト教会大会議長のヨシュア記による「強く、雄々しくあれ」と題したメッセージは、戦前の葛藤を乗り越えて宣教協約を結んだ両教団の新しい世代が、いま直面する困難を乗り越えて、新しい道を進むことを勧める力強いものだった。

挨拶に立った金鐘賢総会長は、両教団の歩みの歴史にもふれながら、かつての不幸な上下関係を乗り越え、いま対等な関係が築かれていることをともに喜び、新しい世代をともに励まそうと述べた。大阪姫松教会が準備してくださった心のこもった食事をいただいた後、両教団の10代、20代、30代の青年たちが、信仰とこの時代を生きることについて、発題した。どれも、自分の「欠け」についての生の声に満ちており、同時にその「欠け」が埋められることの希望が語られていた。

準備の過程で両教団の青年たちの間に生まれた友情と信頼は、両教団にとっての今後の宝になることを確信する。両教団の青年同士の交流がこれを契機に盛んになり、この「生きづらい時代」を、信仰を基盤に「ともに生きる」仲間として歩んでいく姿を支えていこう。　（信徒委員長　金迅野）

海外韓人教会教育と牧会協議会 第11次 大阪大会 参加者 募集

日　時：2018年2月21日(水)16：00～24日(土)12：00
場　所：在日大韓基督教会大阪教会(21日) 開会礼拝
　　同志社びわ湖リトリートセンター(22日～24日)
主　題：「激動する歴史におけるディアスポラ教会の時代的な使命」(エレミヤ29：1～14)
参加費：2万円(3泊4日)、遠距離交通費一部補助あり。
募集人員：20名程度（総会任員、委員長、各地方会2名）
申請と問い合わせ：金柄鎬総幹事(080-4377-3927)

＜マイノリティ宣教センターの歩み＞

主事　金 迅 野 牧師

マイノリティ宣教センターを支えてくださっているみなさんに感謝申し上げる。国内外の教会、団体の支援を受けて、センターは４月に開所して以降、A：人種主義とのたたかい、B：ユース・プログラム、C：和解と平和のスピリチュアリティ開発、D：内外への発信の４つの活動の柱を軸に事業を展開してきた。

センターは、ヘイト・スピーチに抗う市民活動に連帯する活動をおこなったほか、在住外国人の人権を擁護するための院内集会や研究会に参加してきた。また、さまざまな宗教者が協働して平和を構築するための「宗教者平和ネット」などのエキュメニカルな平和活動にも積極的に参与してきた。

ユースを主体とした活動としては、月一回のカフェを開き、非暴力、学術人類館など、マイノリティと暴力をテーマとした学習を深めてきた。９月に大阪で開催した第一回マイノリティ・ユース・フォーラムには、フィリピン、韓国をはじめ内外の青年約20名が集い、大阪の近代化の中で労働力として動員されたマイノリティの生活史を学ぶために、沖縄人の集住地域である大正区とコリアタウンのフィールドトリップをおこなった。また朝治武さん（大阪人権博物館館長）からは被差別部落出身者の歴史と体験について、金耿昊さん（横須賀教会、日本の近現代史研究者）からは、1903年に起きた「人類館」事件について学んだ。新しく試みた演劇ワークショップを通して参加者は、見聞きして学んだ事柄を、表面的な言葉だけではなく身体全体を通して表現する共同作業を通して、学びを立体化した。さらには、ドイツのNPO『顔をみせろよ』が開発した人種主義について考察するカードゲーム『白人はラップができない』の体験もし、日本の様々な状況で差別をどう考えていくのかを学んだ。この教材は、フォーラムに参加した青年たちの発意により、センターで日本版を開発するプロジェクトが立ち上がった。

差別を克服するための学びを、聖書や信仰と結びつけるために、センターでは、現場から聖書を学ぶ「聖書セミナー」と、祈りやダンス、演劇、ゴスペルなど、さまざまな身体表現を通して、多民族・多文化共生を体感できるような場としてのエキュメニカルなフェスティバルを開催する予定である。

個々のイベントや活動については、今後も、facebookやホームページで積極的に情報を発信していく。小さくされた者を愛する主の宣教を、この地で、豊かに実らせるセンターの活動を、今後も支えてくださるよう、切にお願いしたい。